

志賀直哉の「方法序説」

——志賀直哉における「自己」の発見について——

大 貫 徹

1. はじめに

この論文では志賀直哉（明治16年・1883年—昭和46年・1971年）の初期作である『クローディアスの日記』（大正元年・1912年）と『范の犯罪』（大正2年・1913年）を取り上げる。文芸評論家の高橋英夫はこの二つの作品に関して次のように述べている。

高度に難解で、複雑な人間存在の表裏をさぐり、人間心理のひだを搔き分けていった作品として（略）『クローディアスの日記』と『范の犯罪』をあげておかなければならないだろう。この二つは、高度に知的で明晰であり、同時に高度に情念的で複雑である。これ以後、こういう感触の作品は二度と書かれなかったという意味でも、傑出したものといえよう。一口でいってこれらは、殺人と殺意の関係を執拗に追求した小説である。⁽¹⁾

高橋英夫の言うとおりに、この二つの作品は共に「殺人と殺意の関係を執拗に追求した小説」であり、ほぼ同じ内容の物語と言っても決して過言ではない。しかし両者を詳しく検討してみると、高橋は見逃しているのだが、そこには大きな断絶があるように思われる。しかもその断絶は志賀直哉自身の作家活動においてもきわめて重要なものであったと考えられる。結論を先取りして言えば、志賀は『クローディアスの日記』から『范の犯罪』へと書き進むにつれて認識論的転回とでもいうべきものを経験し、そうすることで作家としての方向を明確にしていたのではないかと想像され得るのである。この論文では、したがって、志賀の二つの初期作について詳細に論じることで、先に述べた「認識論的転回」というものの姿を明らかにしたい。

2. 『クローディアスの日記』

大正元年8月と執筆年月が明記されている『クローディアスの日記』は言うまでもなく、シェイクスピアの『ハムレット』を題材とした話である。兄王の息子であるハムレットの言動が次第にクローディアスの心の中に亀裂を生じさせ、やがて思いも寄らぬような自己疑惑が彼の心を蝕み始めて行く。この作品では、こうした様子がクローディアスの視点からきわめて詳細に描かれる。

最初の頃の日記ではクローディアスの余裕のある様子がうかがわれる。

彼は珍らしいいい頭をした男である。理解力も豊かだし、それに詩人だ。自分は近い内に何も彼も語り合つて彼によき味方になって貰はねばならぬ。自分は総てを彼に打ち明けて関はない。⁽²⁾

上の引用にある「彼」とはハムレットのことであり、「自分」とはクローディアスのことである。この引用にあるように、最初、クローディアスはいささかハムレットを甘く見ている。自分の「よき味方」になって貰おうとさえ考えている。それは、クローディアスが自分の「兄の死後その妻を直ぐ妻として自らその王位に」(118頁)就くという「慣習からは愉快な事ではなかった」(119頁)ことをしたからである。これに対して、多くの人が「或不快を感じてゐる」(118頁)て、とりわけハムレットが「さういふ人々の第一人」(同頁)であり、「近頃何となく弱って憂鬱になつ」(同頁)ている。クローディアスはそうしたことに同情さえしているのだ。

それ[彼の態度]にも自分は同情出来る。自分の此柔かい心持は彼との関係では唯一の望みである。自分は自分の此柔かい心持を出来るだけ大切にしなければならぬ。(118頁—119頁)

柔らかな心持ちのクローディアスに対して、固く閉ざされたハムレットという構図がここには見られる。言い換えれば、世間的知もわかまえた大人のクローディアスに対して、子供のようなハムレットというところであろうか。実際クローディアスは、ハムレットが「子供」であるがゆえに、「大人」の事情も知らずに、母親のあまりに早い再婚に反対しているのだとしか考えよ

うとはしない。彼はすべてこの見方から対応しようとしている。ところがこれが思ったほど巧く行かない。

先刻（ハムレットに）会った時、妙な顔をしてゐたから「気持が悪いのか？」と訊いて見た。それに対する彼の答へが自分には不愉快だった。寧ろ子供らしい男である。実際子供らしい低級な悪意の示し方であつた。あの子供らしさに釣り込まれないだけの余裕を常に持つてゐなければならぬ。（119頁）

この短い引用中に「子供」という言葉が三度も使われている点に注意したい。クローディアスは、「子供」のような相手に対して「余裕を常に持つてゐなければならぬ」と繰り返し誓う。しかしその相手がこちらの想像以上に手強いことに、クローディアスは次第に気づいてくることになるだろう。ところで、クローディアスは、ハムレットが示すこうした不快さに対して、日記の中で、何ら恥じることはないのだと幾度も繰り返す。

自分は今、自分の此心持を出来るだけ他に隠してゐる。それは自分が、自分の仕た事或ひは自分の此心持を恥づるからではない。（118頁）

自分は自分の仕た事を少しも恥ぢはしない。然し慣習からは愉快な事ではなかつたに相違ない。自分は少なくとも此数箇月は喜びと苦しみとの間に彷徨してゐなければならぬだろう。（119頁）

自分は今度の結婚を決して恥ぢてはゐない。少しでも恥づる心を持つてゐたら、自分の性質としてそれは到底出来る事ではない。（125頁）

このように、繰り返し「自分の仕た事を少しも恥ぢはしない」と言いながらも、クローディアスはなぜか追いつめられていく。それは、ハムレットの「何となく底意のあるイヤな眼」（124頁）もしくは「あの呪うやうな眼で凝然と見られる時に心の自由を失ふやうな気がする」（同頁）からである。しかしクローディアスはハムレットの「呪うやうな眼」に負けまいとして、しきりに自分の正当性を主張する。クローディアスは同じ文句を繰り返す。

自分は今度の結婚を決して恥ぢてはゐない。少しでも恥づる心を持つてゐたら、自分の性質としてそれは到底出来る事ではない。如何に彼女を愛してゐた

とはいへ、道徳的に何等の自信もなく若し結婚したのなら、自分は寧ろ無法者である。そして愚者である。然し自分には自分だけ、それに対する立派な心用意があつた。其心用意があつたから自分は寧ろ大胆に結婚を申し込み、その承諾を得て、それを直ぐ、天下に発表する事が出来たのである。(125頁)

ハムレットの「子供らしい低級な悪意」(119頁)に対して、「無法者」でも「愚者」でもないと確信しているクローディアスはさらに「立派な心用意」を持ち出す。「其心用意があつたから自分は寧ろ大胆に結婚を申し込」んだのだとさえる。しかしクローディアスは後退を余儀なくされる。

然しそれには何処か弱い所があつたかも知れない。自分は自分の力を正確に計ることを誤つてゐた。今になつて見れば自分は遂に其の弱点を彼から突き込まれたのであつた。が、自分はあれ程に低級な、そして平凡な、理解も同情もない突き込み方でくる事は全く予想しなかつた。(略)彼が自分等に対し、こんなに低級に解しようとは、それは自分の心用意の中にも用意されてゐない事だつた。(125頁—126頁)

もちろんただひたすら後退するばかりではない。クローディアスも「自分はこのに対しては何処までも戦はねばならぬ」(126頁)と決意する。しかしそれもつかの間のこと。クローディアスはすぐに「が、さう思ひながら、今日自分は自身の内に、猶恐ろしい弱点のある事を不図感じ」(同頁)てしまうのである。そのあげく最後には以下のように述懐する。

そしてはつと気がつくと自分で驚いて了つた。自分は自分の心を叱つて、更に「自分に何の恥づる所がある」とはつきりと思つて見た。が、さう思ひながら、そんなに思つてゐなければ、やりきれないからさう思ふのか、實際心の底から恥ぢてゐないのか解らない——こんな考が又ふつと湧く。もう其時は自分が気味悪くなつた。(126頁)

とうとうクローディアスは自分自身が分からなくなつてしまひ、ついには「自分で自分が気味悪くな」るのである。自分自身が分からなくなるとは、「立派な心用意」がしてあつたにもかかわらず、その心用意が次第に曖昧なものへと変貌し、ついには自分の心のありかが不明なものとなつてしまうことである。その結果、今度は逆に「自身の心が自分にとっては最も恐ろしい

者になる」(127頁)のである。自分と自分の心とが離反してしまう状態。そんな状態をクロードィアスはいみじくも「其意味では自分にとって自分の心程に不自由なものはないのである。実際今の自分には、自分を殺そうと考えてゐる彼よりも、どうにもならない自身の自由な心の方が恐ろしい」(135頁)と述べている。ここまで来ると、クロードィアスの自我は崩壊寸前である。いつ狂気に陥ってもおかしくない状態である。実際、ついちょっと前には「自分の仕事を少しも恥ぢはしない」と思っていたはずなのに、いつの間にか「乃公は乃公自身が恐ろしい悪人だったと、そんな気がして」(130頁)きてしまうのである。まさに、最初の頃とは正反対の結論である。善人そのものと思っていた自分がその反対の存在へと変貌してしまっている。もちろんその後も何度かクロードィアスはこの結論に対して反対する。

第一に乃公が若しそれ程巧みに悪事を包み得る悪漢ならば初めから見えすいた貴様のあの狂言などに易々と乗せられるやうな事は仕はしない。のみならず、兄の死後直ぐその妻と結婚するやうな事もしなかつたらう。乃公にはそれが出来るだけに正しい自信があつたのだ。(131頁)

だがクロードィアスの「正しい自信」もこうした流れを押し止めることはできない。クロードィアスはハムレットが描いた筋骨通りに動くしかない。「兄殺しの大罪人」(128頁)という汚名を着せられたまま、クロードィアスは滅亡の淵に立たされてしまうのである。

はたしてクロードィアスは罪を犯したのか、それとも犯していないのか。言うまでもなく志賀の意図はそこにはない。志賀が描きたかったのは、あくまでも、クロードィアスの心の中に亀裂が生じて行く様子である。その結果、あれほど確固たる状態であったクロードィアスの自己がきわめて曖昧模糊になって行ったのは今見てきたばかりである。それでは『范の犯罪』はどうであろうか。それを次に見てみよう。

3. 『范の犯罪』

『クロードィアスの日記』のはぼ1年後に書かれた『范の犯罪』(大正2年9月24日執筆)は次のような一節から始まる。

范といふ若い支那人の奇術師が演芸中に出刃庖丁程のナイフで其妻の頸動脈を切断したといふ不意な出来事が起つた。若い妻は其場で死んで了つた。范は直ぐ捕へられた。(略)所が此事件はこれ程大勢の視線の中心に行はれた事でありながら、それが故意の業か、過ちの出来事か、全く解らなくなつて了つた。(3)

物語の進行と共に「他人に対してはそれ程に柔和で親切で克己心の強い二人が、二人だけの関係になると何故か驚く程お互いに惨酷になる」(264頁)という「不思議な」(同頁)事情が次第に明らかになる。それは、范の妻が他人の子供を身籠もつたまま范と結婚したからである。その子供は直ぐに死んでしまうが、しかしそれを知つた范は、その後どうしても妻を許すことができず、最近では、以下の引用にあるように、その死さえ願うようになる。

私は近頃自分に本統の生活がないといふ事を堪らなく苛々して居た時だつたからです。床へ入つてもどうしても眠れません。興奮した色々な考が浮んで来ます。(略)中ぶらりんな、うぢうぢとした此生活が総て妻との関係から出て来るものだといふ気がして来たのです。(略)そして一方で死んでくれればいい、そんなきたないいやな考を繰返してゐるのだ。(272頁)

そしてさらに范は「其位なら、何故殺して了はないのだ。殺した結果がどうなろうとそれは今の問題ではない。牢屋へ入れられるかも知れない。しかも牢屋の生活は今の生活よりどの位いいか知ればはしない」(272頁)とさえ思うようになる。このような「中ぶらりんな、うぢうぢとした」状況の中で妻の殺害が生じるわけである。したがって最初、范は自分の行為が「故殺」(276頁)であると判断する。しかしよくよく考えてみると、この凶行には何ひとつ客観的証拠がない以上、自分がこれは過失であると言い張れば、決して有罪とはならないのではないかと思いつく。そのため范は自分の行為が過失であると言い張るための事例をいろいろ考え始めるのである。

其処で、私は静かに出来事を心に繰返しながら、出来るだけ自然にそれが過失と思へるやう申立ての下拵へを腹でして見たのです。(276頁—277頁)

しかしいろいろ「申立ての下拵へ」している内に、范は次第に次のように

考え始める。

所が其内、何故、あれを自身故殺と思ふのだろうか、といふ疑問が起つて来たのです。前晩殺すといふ事を考へた、それだけが果して、あれを故殺と自身でも決める理由になるだろうかと思つたのです。(277頁)

そしてとうとう「段々に自分ながら分からなくなつて」(同頁)くるのである。

段々に自分ながら分からなくなつて来ました。私は急に興奮して来ました。もう凝つとしてみられない程興奮して来たのです。愉快でなくなりました。何か大きな声で叫びたいやうな気がして来ました。(同頁)

この事件の複数の目撃者が証言しているように、どちらかに決めてしまえるような客観的証拠はここにはない。あるものは単なる状況証拠だけである。したがって事件の当事者である范が「これは過失である」と言えば、裁判官もその通りと判断せざるを得ないはずである。しかし、事件が生じた瞬間に范が「妻を殺害した」と判断した直観は、本来ならば決して忘れてはならないものである。このことは裁判官と范とのやりとりの中で明らかにされている。

(范) 「たうたう殺したと思ひました」

(裁判官)「それはどういふのだ。故意でしたといふ意味か？」

(范) 「さうです。故意でした事のやうな気が不意にしたのです」(略)

(裁判官)「お前は何処までも自分のした事を故意であると思つてゐたのだな？」

(范) 「さうです。そして直ぐ、これは過殺と見せかける事が出来ると思つたのです。」

(裁判官)「然し全体何がお前にそれを故殺と思わせたのだろうか？」

(范) 「私の度を失つた心です」(275頁—276頁)

ここでは「故意でした事のやうな気が不意にした」という箇所がポイントである。これは直観的に「故意である」と判断したことを如実に示しているからである。しかし范は考えている内にその直観を忘れてしまう。そしてすでに引用したように、「所が其内、何故、あれを自身故殺と思ふのだろうか、

といふ疑問が起つて来たのです。前晩殺すといふ事を考へた、それだけが果たして、あれを故殺と自身でも決める理由になるのだろうか」と思うようになるのである。これはどうしたことなのだろうか。范がここで思考停止をしてしまったからではないだろうし、ましてや意図的に自分を偽ろうとしていたわけでもないだろう。おそらくこの変心にこそこの作品の独自性があるのだ。したがって、この論文では范のこうした変心の底にあるものを明らかにしていきたい。

ところで、范の証言より先に、范の助手は裁判官に訊かれて次のように言っている。

(裁判官)「では出来事のあつた瞬間に何方かと思つたのか？」

(助手)「思ひました。(殺したな)と思ひました。」

(裁判官)「さうか」

(助手)「所が口上云ひの男は(失策つた)と思つたさうです」

(裁判官)「さうか——然しそれは其男が二人の平常の関係を余り知らない所から単純にさう思つたのではないかね？」

(助手)「さうかも知れませんが、私が(殺したな)と思つたのも、同様に二人の平常の関係をよく知つている所から、単純にさう思つたのかも知れないと、後では考へられるのです」(266頁)

この助手証言でも明らかなように、ここには状況証拠しかない。したがって、通常ならば、二人(范とその妻)の平常の関係を考慮し、裁判官はこの事件を殺人事件であると断定するはずである。しかしこの物語ではそうはならない。「状況証拠」しかないという状況をまさに利用して、作者志賀は、たとえば明治43年作の短編『剃刀』(1910年)のような殺人心理分析譚から、この物語をまったく別な話へと変貌させようとしている。ある行為が見方によって「故意」と見えたり、「過失」と見えたりすること、言い換えればこの行為をどちらかに決定することができないということ、そのことの意味そのものを問おうとしている。いわば心理学的な問題機制から認識論的なそれへと変更しようとしているのだ。

ここでゲシュタルト心理学で言う「図—地」理論を想起することも決して意味がないことでもないだろう。たとえばルビン(E. Rubin)の曖昧な盃の図形。この有名な図形は、そのつどの条件によって図と地とが交替し、と

ときにはそれが盃のように見え、ときにはそれが人の顔のように見えるというものである。しかしメルロ＝ポンティが言うように、こうしたことはあくまでも「病理学の症例ないし実験室の現象」⁽⁴⁾にすぎない。普段の日常生活では決してこのようなことは生じない。それは私たちは普段は必ずそのどちらかに立っているからである。⁽⁵⁾しかしながら、そうした日常をしばしの間「括弧」に入れて考えるとき⁽⁶⁾、そこにどちらとも決定できないような事態があることに気づくというわけである。この物語で范がいろいろ考えている内に行き着いたことがまさにこの意味での「決定不可能」ということではないだろうか。このとき范はまさに「自然的状態においてはまりこんでいる行動の文脈から人為的に孤立させられている」⁽⁷⁾状態となる。言い換えれば日常という文脈から離れている状態というわけである。日常生活をいわば「括弧」(エポケー)に入れているのである。だからこそ范は以下のように反応するのである。

段々に自分ながら分からなくなってきました。私は急に興奮して来ました。もう凝つとしてゐられない程興奮して来たのです。愉快でなくなりました。何か大きな声で叫びたいやうな気がして来ました。(277頁)

どうして愉快になったのか。それは范が日常生活を離れてしまい、あらゆる利害を超越してしまったからである。それまで何度もそうしようと思いがながらも決してできなかったことも今はたやすくできるようになったからである。たとえば「離れて考へる時には割に寛大で居られるのです。所が、妻が眼の前に出て来る。何かする。そのからだを見てみると、急に圧へきれない不快を感ずる」(269頁)ばかりであった范が、今、ようやく妻への不快感から逃れることができたからである。范の妻はこのとき「妻」という特別な意味＝価値を有した存在ではなくなってしまうている。単なる女にすぎないと言えば、言いすぎかも知れないが、それにきわめて近い存在である。したがって裁判官が范に「所でお前には妻の死を悲しむ心は少しもないか？」と尋ねるとき、范は次のように答えるのもきわめて当然であろう。

「全くありません。私はこれまで妻に対してどんな烈しい憎しみを感じた場合にもこれ程快活な心持で妻の死を話し得る自分を想像した事はありません」(277頁—278頁)

このように答えるのは、范が本質的に冷たい人間だからではないし、あるいは憎い妻が死んでしまってほっとしているからではない。范自身の心持ちが大きく変わったからである。日常生活を「括弧」に入れることで、妻が范にとって意味＝価値をまったく有しなくなってしまったからである。正確に言えば妻ばかりではないだろう。彼にとっては世界全体が意味＝価値を喪失してしまった状態であるはずである。

4. 「自己」の発見

ところでいま上で引用した一節の直前に范はこのように言っている。

自分を欺いて、過失と我を張るよりは、何方か分からないといつても、自分に正直でゐられる事の方が遙に強いと考へたのです。私はもう過失だとは決して断言しません。そのかはり、故意の仕業だと申す事も決してありません。
(277頁)

ここで使われている「自分に正直」という言葉はいったいどのようなことを意味しているのであろうか。というのも「自分に正直」と言うのであれば、本来は、妻の頸にナイフが刺さった瞬間に自分で「たうたう殺したと思ひました」(275頁)と感じた自分の直観に正直であるべきと思うからである。しかし范はそうは考えない。それどころか范は自分の直観を疑い始めるのである。この点をもう一度考えてみよう。

ここには自分の直観(「故意の仕業である」と判断している直観)とそれを隠蔽する申し立てという構造がある。言い換えれば自分の内部の真実とそれを隠蔽する外見という構造である。しかしこれだけであれば何の問題もない。范は自分の行為を明確に認識している。だがクローディアスがそうであったように、范も次第に自分の内部の真実が危うくなって来る。しかし范は、ハムレットのような、敵意に満ちた他者によってそうした真実がぐらつくのではない。ただ「静かに出来事を心に繰返し」(276頁―277頁)ている内に、疑惑の目を向けるようになるのである。内省している内に自己への疑惑が生じてくるのである。

其処で、私は静かに出来事を心に繰返しながら、出来るだけ自然にそれが過失と思へるやう申立ての下拵へを腹でして見たのです。所が其内、何故、あれを自身故殺と思ふのだろうか、といふ疑問が起つて来たのです。前晩殺すといふ事を考へた、それだけが果して、あれを故殺と自身でも決める理由になるだろうかと思つたのです。段々に自分ながら分からなくなつて来ました。(276頁—277頁)

簡単に言えば范自身の中にクローディアスとハムレットがいるというわけである。しかしここから先、范とクローディアスとは大きな違いが生じる。それは「段々に自分ながら分からなくなつて」(277頁) 来ることは同じだとしても、クローディアスが「もう其時は自分で自分が気味悪くな」(126頁) するのに對して、范はむしろその逆に「私は急に興奮して来ました。もう凝つとしてゐられない程興奮して来たのです。愉快でなくなりました。何か大きな声で叫びたいやうな気がして来ました」(277頁) という事態となるからである。どうしてこのようなことが生じるのか。それは、「段々に自分ながら分からなくなつて」(同頁) 行つた際、クローディアスがしきりにどちらかの立場に固執しようとしたのに対し、范は「何方か分からないといつても、自分に正直でゐられる事の方が遙に強い」(同頁) と考えたからである。もちろん范もクローディアスと同様、しばらくの間「故殺」と「過失」の間を「彷徨して」(119頁) いた。しかし「所が其内、何故、あれを自身故殺と思ふのだろうか、といふ疑問が起つて来た」(277頁) とき、范は「自分に正直でゐられる事の方が遙に強い」という言葉を持ち出すのである。ある立場に立って、どちらかに決めようとしきりに考え悩んでいる内に、とうとう、考え悩んでいる自分自身が曖昧となり、あげくに分裂してしまったのがクローディアスとするならば、自分の立つ位置そのものをいわば脱臼する形でずらしてしまったのが范ということになるのか。

先に「自分に正直」という言葉はいったいどのようなことを意味しているのであろうかということ述べた。それは志賀がこの言葉にかなり独特なニュアンスを付与しているのではないかと思われるからである。ここでもう一度繰り返すが、范が「自分に正直」であるならば、本来ならば、「たうたう殺したと思ひました」と感じた自分の直観に「正直」であるべきである。しかし范はなぜかそうは考えない。それどころか自分の直観を疑うようになるの

である。そして内省している内に「段々に自分ながら分からなくなつて」くるのである。

このあたりの范の心の中をもう少し想像してみよう。范は内省している内に「段々に自分ながら分からなくなつて」くる。それでも范は内省に内省を重ねる。そのうちに自分の直観どころか、おそらく妻や世界そのものの存在までも疑ってみるようになる。いわばあらゆることを「括弧」に入れてみる。するとますます「自分ながら分からなくなつて」行く。しかしさらに范は「静かに出来事を心に繰返す。やがてようやく最後になって、あたかも奥底にある堅固な核に辿り着くかのように、范は再び「自分」というものに辿り着く。もちろんこのときの「自分」はこれまでの「自分」とはまったく違う。いわば見出された「自己」、すなわち第二の「自己」とでも言うべきものであろう。しかしこれはまるでデカルトの『方法序説』の一節にあるような状況ではないだろうか。疑って疑って、最終的には自分自身の存在までも疑ったデカルトが最終的に辿り着いたのが「コギト、エルゴ、スム」であったように、范もここで新しい、しかしより確実な「自己」を見出したのではないだろうか。デカルトは言う。

わたしは、それまで自分の精神のなかに入っていたすべては、夢の幻想と同じように真でないかと仮定しよう、と決めた。しかしそのすぐ後で、次のことに気がついた。すなわち、このようにすべてを偽と考えようとする間も、そう考えているこのわたしは必然的に何かのかでなければならぬ、と。そして「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する〔ワレ推ウ、故ニワレ在リ〕」というこの真理は、懐疑論者たちのどんな途方もない想定といえども揺るがしえないほど堅固で確実なのを認め、この真理を、求めていた哲学の第一原理として、ためらうことなく受け入れられる、と判断した。⁽⁸⁾

范は最終的に、自己の行為が「故意」か「過失」か、それをどちらかに決定することができないことを認める。むしろ積極的にそれを認める。しかしその場合、范がクローディアスとは違って自分に少しも不安感を覚えることがないのは、たとえその行為が決定不可能であるとしても、そうした判断をしている自己に対しては明確な手応えを感じているからである。このとき范が感じている自己は堅固で確実な自己である。まさにデカルトが言うところの「揺るがしえないほど堅固な確実な」自己である。だからこそ「何方か分

からないといつても、自分に正直でゐられる事の方が遙に強いと考へたのです」という言い方⁽⁹⁾が出てくるのである。

5. 結 論

『クローディアスの日記』と『范の犯罪』は、高橋英夫が言うように、共に「殺人と殺意の関係を執拗に追求した小説」であり、しかも「事がある段階に入ったことによって、また事がある結果に到達したことによって、最終的な判断は不可能であるということ（略）真実で切迫した声として」⁽¹⁰⁾語った小説である。にもかかわらずその違いはかなり大きい。自分というものが他者の侵入によって、ずたずたに引き裂かれ、崩壊寸前になってしまったのがクローディアス。その一方で、自分というものが逆にその存在感を強固にしていったのが范である。いわばデカルトのそれとかなり近い状況で、范は自分の「自己」を確認したと言えるのではないだろうか。疑って疑って、自分自身までも疑ったデカルト同様、范もまた自分の行為を繰り返し考えてゆく内に、次第に、その行為が故意でなされたのか、それとも過失だったのか少しも判別することが出来なくなり、その結果そこに、どちらとも判別することが出来ない自分がいることに辿り着くのである。それは「故殺」と判断していた自分を否定することではない。「故殺」とも「過殺」とも判断つかないことを明晰に認識している自己への確信に辿り着いたということである。自己への信頼を取り戻したのである。だからこそ范は「自分に正直でゐられる事の方が遙に強い」と言うのである。

これ以降、志賀は『クローディアスの日記』のような物語を二度と書くことはない。もちろん『范の犯罪』のような作品も書かない。しかし『范の犯罪』で見出した堅固な「自己」というものを決して失うことはないだろう。⁽¹¹⁾ そういう意味では、これ以降のすべての物語を『范の犯罪』の延長上にあるものとして考えることも十分に可能である。たとえば『和解』（大正6年・1917年）の次のような一節。

自分は祖父の墓の前を少時歩いてゐた。其内祖父が自分の心裡に蘇つて来た。其祖父に対し自分には「今日祖母に会ひに行きたいと思ふが」といふ相談するやうな気持が浮んだ。「会ひに行つたらよからう」と直ぐ其祖父が答へた。自

分の想像が祖父にさう答へさしたと云ふにしては余りに明かに、余りに自然に、直ぐそれが浮んだ。それは夢の中で出会ふ人のやうに客観性を持つてゐて、自分には如何にも生きてゐた時の祖父らしいかつた。⁽¹²⁾

祖父の「会ひに行つたらよからう」という声ははたして本当に聞こえたのか、それとも単なる幻聴なのかなどと本来ならば考え込んでよさそうに思える。しかし志賀とほぼ等身大の主人公「自分」はそんなことでは悩まない。さらに幻聴ではないとすれば、自分の中に他人の声が明瞭に聞こえてきたということになるのだから分裂症的な症状に近いものであろう。しかしそのようなことにも悩まない。それどころか「夢の中で出会ふ人のやうに客観性を持つてゐる」とさえ言う。もちろんこれが夢の中の出来事かどうかなどと悩むこともない。「余りに明かに、余りに自然に」祖父が現れ、祖父の声が聞こえてきたというのである。祖父の声を聴いた「自己」に対する疑いや不安などここにはない。自己に対する信頼感しかそこにはない。幻聴であろうとなかろうと、聴いた「自分に正直でゐられる事の方が遙に強いと考へ」ている「自分」しかいないのである。かくして主人公「自分」はこうした自己への信頼の上にあらゆる過酷な運命⁽¹³⁾に立ち向かうことになるのである。この『和解』しかり、長編小説『暗夜行路』しかりである。したがって志賀は、後の世代によって、『自己』に忠実に生きようとした作家・志賀直哉⁽¹⁴⁾という言い方で括られることになるのである。文芸評論家の勝又浩は言う。

志賀直哉が強い自我の持ち主であったことは改めて言うまでもない。(略)ただ[自我の]強い人、自己を押し通した人というだけならば特に珍しがることでも有り難がることでもないはずだ。(略)志賀直哉が格別であるのは、彼が単に人格的な特徴として[自我の]強さを持っていただけではなく、その強さを自覚し、対象化しているからだ。言い換えれば自我を貫くことを一つの思想としているのだ(略)。⁽¹⁵⁾

注

- (1) 『志賀直哉全集・第2巻』(岩波書店、1999年、456頁)
- (2) 『クローディアスの日記』からの引用は特に断らない限りすべて『志賀直哉全集・第2巻』(岩波書店、1999年)からである。この箇所は『志賀直哉全集・第2巻』118頁からの引用である。以下はその頁数のみ本文中に示す。

- (3) 『范の犯罪』からの引用は特に断らない限りすべて『志賀直哉全集・第2巻』(岩波書店, 1999年)からである。この箇所は『志賀直哉全集・第2巻』262頁からの引用である。以下はその頁数のみ本文中に示す。
- (4) メルロ＝ポンティ『行動の構造』(みすず書房, 1964年, 224頁)
- (5) この点に関しては、竹田青嗣『意味とエロス』(作品社・1986年)の以下の一節を参照されたい。

たとえば現代的な懐疑論は、「君は君が正気であるかどうかを決して決定できない」と言う。これは論理的には正しいように見えるがどこかおかしいとわたしたちは思うはずだ。その理由は、じつはわたしたちは直観的に、そもそもその問い自体が、人間が絶えず正気と正気ではない物を決定しているという事実のうえではじめて成立していることに気付くからである。(13頁－14頁)

- (6) 日常をしばしの間「括弧」に入れるとは、言うまでもなく、フッサールの「現象学的還元」において「エポケー」と呼ばれる方法的操作のことである。

フッサールは、究極的実在としての「世界が存在する」ということを無条件に断定する、自然的態度の(一般定立)を停止する操作をエポケーと呼んだ。現象学的還元の一環をなす方法的操作である。(木田元・丸山圭三郎他編集『コンサイス20世紀思想事典』[三省堂, 1989年, 168頁])

- (7) メルロ＝ポンティ前掲書(224頁)
- (8) デカルト(谷川多佳子訳)『方法序説』(岩波書店, 1997年, 岩波文庫・46頁)
- (9) 重松泰雄は「『范の犯罪』解説」と題する論文の中で「まさか正直であることだけが無罪の理由ではあるまい。要するに、結末における裁判官の「無罪」判決は、独立した作品として読むばあい、このままでは明らかに説得力に欠けていると言わざるをえないのである」(池内輝雄編・日本文学研究資料新集21『志賀直哉』, 有精堂, 1992年, 139頁)と述べているが、論者としては逆に、まさに正直であることだけが、この場合、無罪の理由なのであると言いたい。裁判官の無罪判決を通して、若き志賀は、堅固で確実な「自己」を見出した自分を讃えていると読みたいのである。
- (10) 『志賀直哉全集・第2巻』(岩波書店, 1999年, 456頁)
- (11) もちろんこれ以降のすべての作品がそうだとはいえずしも言い切れない場合もある。たとえば『断片』(大正7年10月執筆・大正8年11月発表)や『黒犬』(大正14年1月発表)などは、『クローディアスの日記』と同様、自分と自分の心とが離反してしまう状態を記述している。しかし『濁った頭』(明治44年・1911年)や『不幸なる恋の話』(同年)のように、自己の崩壊が大きなテーマとなっていた志賀の初期世界とは異なり、こうした小品が、『范の犯罪』以降の志賀においては、もはや文字通りの小品にすぎないことは明らかである。

- (12) 『志賀直哉全集・第3巻』(岩波書店, 1999年, 79頁)
- (13) これに関しては『暗夜行路』(後編第三・19)にある次のような一節を引用したい。

どうして総てがかう自分には白い歯を見せるのか、運命と云ふものが、自分に対し、さう云ふものだとならば、そのやうに自分も考へよう。勿論子を失ふ者は自分ばかりではない(略)只、自分は今までの暗い路をたどつて来た自分から、新しいもつと明かるい生活に転生しようと願ひ、その曙光を見たと思つた出鼻に、初児の誕生と云ふ、喜びであるべき事を逆にとつて、又、自分を苦しめて来る、其所に彼は何か見えざる悪意を感じないでは居られなかつた。『志賀直哉全集・第4巻』(岩波書店, 1999年, 421頁)

- (14) これは本多秋五『志賀直哉』(上・下)(岩波書店, 1990年, 岩波新書)の表紙カバーに印刷されている一節から抜粋したものである。
- (15) 前掲『志賀直哉全集・第4巻』の月報4から引用した。